

## トップの塗りについて

今回から、複数回に分けてトップの塗りについて、解説していきたい。具体的には、1. トップの配色について、2. 塗りの幅について、2つの事項について、解説していく。

1. トップの配色について
2. 黒帯の幅について
3. 色の幅について

今回から、複数回に分けてトップの塗りについて、解説していきたい。

### 1. トップの配色について

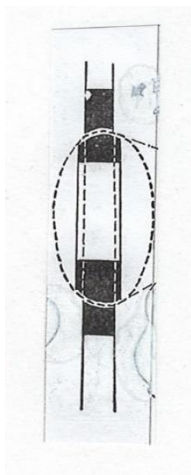
トップの目盛りは、へら鮎のアタリやさわりを見極めるもので、かつ1日中眺めていることから、見やすく、目が疲れないものが望ましい。

また、視力や感覚には個人差があるため、しゃくし定規にこれが良いと決めつけることは難しい。

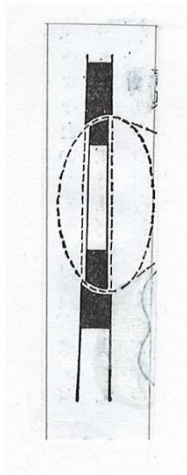
トップを見やすくするには、色のコントラストを上手に塗り分ける必要がある。

色には、青を中心とした寒色系と赤橙、橙、黄橙、黄といった暖色系がある。

暖色は、実際よりふくらんで見える膨張色であり、また、進出色といって近くに感じる色でもある。



暖色：実際よりも膨らんで見える。



寒色：実際よりも細く見える。

それでは、暖色ばかりで配色すれば、トップは見やすいのであろうか。

暖色ばかりの配色はコントラストが弱くなるため、これまた、見づらいトップとなってしまう。このコントラストを出すために、赤や橙の間に中間色的な黄緑をはさむのが一般的である。

そして、勝負目盛りといった「アタリを取る位置」や「エサ落ち目盛り」に見やすい暖色系の色である赤やオレンジを配色するのが、現在の一般的なトップの塗りである。

## 2. 黒帯の幅

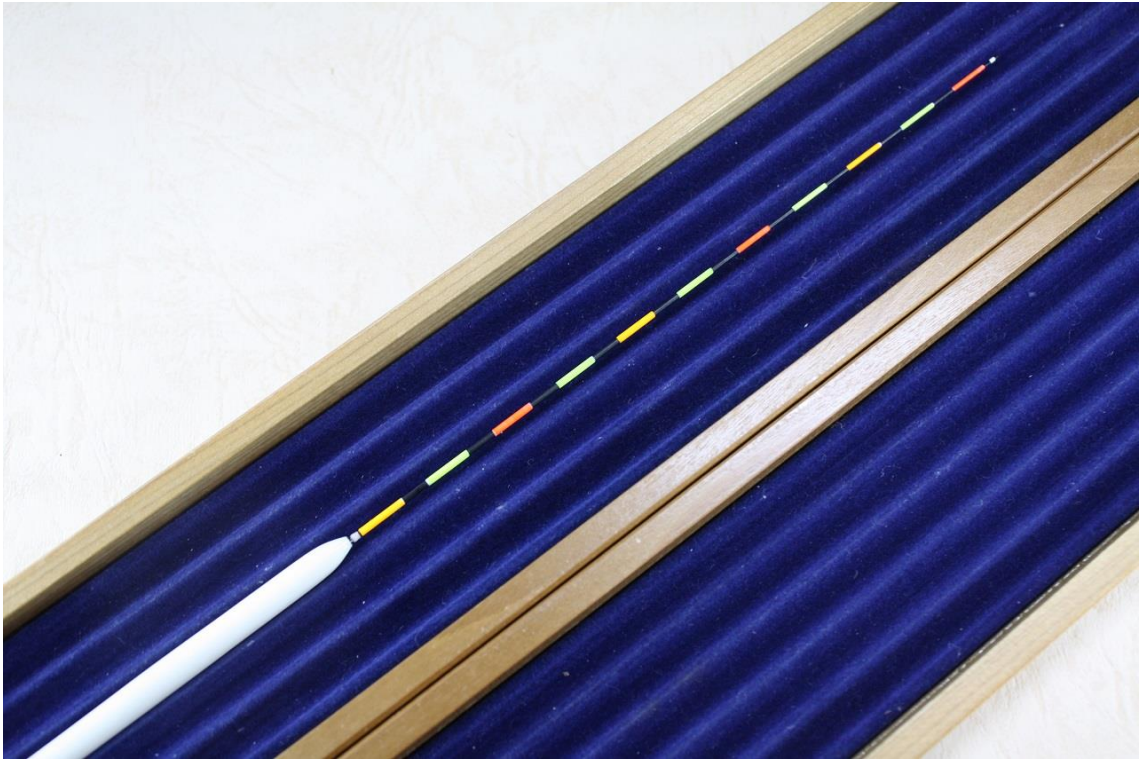
上記の赤、オレンジ、黄色といった暖色を中心に、緑や若草色といった中間色を挟んだ配色の区切りに黒の帯で区切りをつける。この黒の帯、俗に言う「黒帯」の幅がトップの見やすさを大きく左右する。結論から先に申し上げると、見た目以上に幅の広い黒帯のほうが、トップは断然見やすくなる。

手元での見栄え、ショーケースにあるウキのトップの見栄えと、実際の釣り場で水面に浮かべたトップの見栄えは大きく異なる。特に、竿が長くなればなるほど、その差は顕著になる。

## 3. 色の幅について

トップとボディの付け根の節の間隔は狭く、トップ先端に行くほど間隔は広がっている。多くのヘラウキのトップは、先端が細くなるようにテーパーがついている。

これは、ウキが立ち上がる際の水の表面張力を軽減するよう細工されたものである。



画像：カラーで見ると、トップ先端にいくほど、塗り幅が狭く見える。実は、色部分は全節10mm、黒帯は全節7mmで塗り分けたトップである。

テーパー付のトップの場合、上記写真のように、同じ塗り幅で塗ってしまうと、上部ほど塗り幅が狭く見えてしまう。これでは、風で波立つ際には、細かすぎて見づらいつと感ずることもある。

これに対応するために、多くのへ라우キのトップの塗り幅は先端にいくほど、幅が広がっている。

また、エサ落ち目盛りの設定にも左右されるが、トップ付け根付近のアタリは、ハリスが張っていないことから、アタリも小さくなる傾向があり、このアタリを取るためにも、トップとボディの付け根の節の間隔は狭くなっている。

次回は、トップを見る目の錯覚とトップ塗装の技術的な面について、解説したい。